

「貝原益軒」

ささぐり紀行 その五十六

幕末に來日したシーボルトは、貝原益軒のことを日本のアリストテレスと評して、実証的な学問態度を高く評価していたといえます。この江戸時代初期の天才の生涯を紹介しましょう。

寛永7（1630）年、益軒は当時福岡藩士であった父寛齋の5男として福岡城内で生を受けました。名は篤信といい、晩年に益軒と号しました。母とは、益軒が6歳の時に死別します。8歳から11歳にかけて、父に従い八木山に移り住み、そこで山野を駆け巡り本草学の基礎を身につけたり、軍記物などの書籍を読んだりしていました。

19歳で2代藩主黒田忠之の御納戸御召料方という衣服調達の出納係となりましたが、その2年後、藩主の怒りをかい21歳で免職となりました。それから7年という長い浪人生活を送ることとなります。その間、自費で長崎に遊学しました。長崎は国内唯一の貿易港である出島を擁していたため、当時の最新情報が集まる場所でした。そこで、益軒は最新の医学や中国の文献を学びます。

忠之の死後、3代藩主となった光之にとりたてられ、27歳の時再出仕することとなります。光之は、学問に非常に熱心な藩主だったため、以後益軒の活躍する場面が増えることになりました。

再出仕早々、藩主から京都遊学を命ぜられ、そこで、木下順庵（1621～1698）などの学者から儒学を学び、『農業全書』を著した農学者の宮崎安貞（1623～1697）とも交流を深めました。益軒は、旅をすることが非常に好きだった

たようで、生涯で12回江戸に行き、京都へは24回も足を運んでいます。

寛文8（1668）年、39歳になる益軒は、黒田藩の支藩秋月藩士、江崎広道の娘の初（当時17歳）と結婚しました。初は後に東軒と名のようになります。2人はとても仲むつまじく、共によく旅をしたようです。

寛文11（1671）年、藩主光之から『黒田家譜』編纂の命を受けた益軒は、延宝6（1678）年に『黒田家譜』12巻を藩主光之に献上しましたが、その後追補を重ね17巻までにし、73歳になるまでこれが続けました。

天和2（1682）年、徳川綱吉が、5代將軍になったので、祝賀のために朝鮮通信使が來日したとき、益軒は甥の好古と供に朝鮮通信使の接待役を勤めました。当時福岡藩では、韓人漂流民の検察と朝鮮通信使を迎えることが重要な責務でした。

元禄元（1688）年、59歳の益軒は、藩主光之の命を受け、甥の好古と供に念願であった『筑前国続風土記』の調査を開始し、15年後の74歳の時に完成させ、世子綱政に献上しますが、その後3度の追補を行っています。宝永4（1707）年、益軒78歳のときに光之が死去します。

その後矢継ぎ早に、我が国初の体系的薬用博物学の著書で16巻からなる『大和本草』や『益軒十訓』とも言われる『大和俗訓』『和俗童子訓』『家道訓』などを著しました。

正徳3（1713）年、東軒夫人が死去します。この年、天地父母の恩恵により生まれた人は身勝手な振る舞いをせず、慎むことなどを



貝原益軒『養生訓』

教えた『養生訓』を著します。そして85歳の時に、『慎思録』と朱子学に対する疑いを述べた『大疑録』を完成させました。その年の8月27日に益軒は死去し、金龍寺に東軒夫人と並んで葬られました。

貝原益軒は、儒学だけではなく、医学や本草学も治め、また学問の他に、教育や経済の分野でも功績を残しています。生涯で1,353部の書籍を読破したと言われており、まさに万能タイプの博物学の先駆者でありました。

参考資料 『ふくおか人物誌「1」 貝原益軒』

岡田武彦監修 『老いてますます楽しむ』 山崎光夫

広報ささぐり 平成21年12月号掲載